

子育てにおける家庭と保育施設との共空間創出の可能性 — 私立M幼稚園の行事における実践をもとに —

及川 留美

Constructing a Space to Cooperate together in Raising Children at Home and Kindergarten

Rumi Oikawa

要 旨

子育てをめぐる問題を背景に、子育て支援に関する施策が展開されている。しかしその多くは、私的領域と公的領域の枠組みを超えたものとはなり得ていない。M幼稚園において長年実施されている行事では、子どもたちの健全な育ちを目的とする家庭と幼稚園との共空間が創出され、共同の育児観が醸成されていると考えられた。行事の事例を分析することを通して、共空間の創出のためには、親子カップリングの解体と親の状況への参加および関与が重要であることが示唆された。

キーワード：子育て支援、幼稚園、園行事、保護者参加

1. 問題の所在

少子化、親の子どもへの虐待、いじめや引きこもりなど子育てをめぐる問題を背景に、子育て支援の重要性が言われている。平成24年には子ども・子育て支援法が制定され、序章では、子育てについての第一義的責任は父母その他の保護者が有することと同時に子ども・子育て支援はあらゆる社会の構成員が協力して行われなければならないと明記されている。しかしこの理念が子育て支援の現場に反映されていると言いき難い現状がある。

子育てを社会で支えるという考えの背景には、育児不安をはじめとした家庭における子育て機能の弱体化がある。牧野（2009）は近代家族に特徴的な閉じられた家族が子どもの育つ環境として適切ではないとし、子育てを社会化することを提唱している。⁽¹⁾一方で、少子化対策の中核となっている保育施設の拡大は、子育てを家庭から保育施設に「外注化」し

ているにすぎず、子育て支援自体の危機であるという指摘がある。⁽²⁾

2000年代以降の少子化対策として「子育てを社会で支える体制化づくり」が活発化したが、同時に家庭の「しつけ機能の不全」を前提として教育基本法には「父母その他の保護者は、子の教育について第一義的責任を有するものであって、生活のために必要な習慣を身に付けさせるとともに、自立心を育成し、心身の調和のとれた発達を図るよう努めるものとする」（第十条一項）と記された。これにより親役割を認識せよという政策が明文化される。⁽³⁾「子育ての社会化」の言説は、上記でみてきたように子育てを家庭という私的領域の責任であることを強調しながら、社会で支援することを推し進める二重化状況としてとらえられているといえる。松木（2013）はその要因が近代社会を構成する公的領域と私的領域（家庭）との区分にあるとし、子育て支援の現場に混乱をもたらす要因であるとしている。そして子

ども・子育て支援法等に記されている理念は、「子ども」をそのケアを通じて「家族」に排他的に結びつけるのではなく、より「広範」な社会と結びつけるという近代社会の原理の書き換えであることを指摘する。⁽⁴⁾

松木が指摘するように、子育てや子育て支援における施策や実践は、私的領域である家庭と公的領域との二分でとらえられる傾向にあった。子育て支援の理念にもとづき家族の子育てとより広範な社会との結びつき、つまり「共」という視点において分析される必要があると考えられる。

2. 研究の目的

親の養育力の低下が問題視されるようになり、幼稚園や保育所をはじめとする保育施設において子どもの保育とともに親の子育て支援の重要性が指摘されている。幼稚園教育要領では幼稚園が「地域における幼児期の教育センターとしての役割を果たすよう努めること。」⁽⁵⁾とし、幼稚園の子育て支援における位置づけを示している。こうした流れを受け、各保育施設において子育て支援のための取り組みがされるようになった。

筆者は私立M幼稚園において数年間にわたりフィールドワークを行ってきた。M幼稚園の父母たちは「M幼稚園の子どもたちがかわいい。」「M幼稚園の子どもたちの成長が楽しみ。」とし、積極的に園行事やサークル活動に参加していた。子育てを「私的領域」とし、わが子の成長のみに関心をむける親が多い現代において、共に子どもたちを育てるという意識が強いM幼稚園の父母は特徴的である。

M幼稚園の父母に見られるような子育ての意識は、園の実践によって醸成されると考えられた。M幼稚園では、保育者そして父母および父母のOBで構成される園社会が、園全体の子どもたちの育ちを支える実践が長年にわたって行われていることが観察された。⁽⁶⁾ 本研究の目的は、M幼稚園における実践をもとにし、子育てにおける共空間について考察を加えるものである。またM幼稚園の実践から子育て

て支援への応用可能性について検討を加える。

3. 私立M幼稚園について

(1) 子どもたちの姿

M幼稚園は1953年に開園された歴史のあるキリスト教系の私立幼稚園である。まずはそこにおける子どもたちの姿について述べる。M幼稚園では教師による言語的教示などの直接的、言語的関与がそれほど行われていなくても、自発的に当番活動を行ったり、自発的に呼びかけあって集合したりする姿が頻繁に観察される。小川・岩田はその理由として第一に担任教師と子どもたち、あるいは子どもたち同士のノリ⁽⁷⁾（リズム）の共有度が高いこと、第二に第一の点を前提として、当番の定型的なふるまい方（セリフと動き方）を子どもたちが習得していることとしている。またこうした習得は、年少児が年長児のふるまいをモデルとし、見てまねることを可能にする⁽⁸⁾としている。M幼稚園において年少児が年長児のふるまいを習得することは日常生活場面に限らない。例えば毎月行われるお誕生会は、年少児クラス、年中児クラス、年長児クラスおよび保護者がホールに会し、セリフの応答やノリによって定型化されたプログラム構成にて行われる。⁽⁹⁾ ここでも教師による言語的な教示があまりない中で能動的に参加する子どもたちの姿がみられる。年少児はこのお誕生会に参加し、年長児とともにノリの共同生成をすることを通して、お誕生会におけるふるまいを習得していくのである。M幼稚園では、日常生活およびお誕生会をはじめとした行事において、主体的な幼児集団の生成をめざす保育が展開されているといえる。

(2) 保護者の姿

M幼稚園では、保護者が積極的にそして主体的に園行事に参加する姿が見られる。父母の役員として参加したり、希望者によるサークル活動の一環としてお誕生会の出し物やお話し会を行ったりと参加の形態はさまざまである。（表1）園の案内HPには「お母さん方はM幼稚園の年間行事には絶対にかかせないのでできない貴重な存在です。子どもたちの幼稚

表1 保護者が参加する行事一覧

行事名	実施月	概要
お誕生会 (毎月1回)	毎月	年12回行われる行事である。その月のお誕生児およびその保護者も含めて祝うもので、会の構成は毎月ほぼ同様である。会の中心となる出し物は、母親の自主サークルが交替で担う。各クラスの保護者が担当となりイスを並べたり、片付けたりなどの会場の設定をする。
お母さんと遊ぼう	5～6月	全クラスにて行われる。年少児・年中児は保育室でお母さんたちと一緒にゲームなどで遊ぶ。年長児は園庭に全クラスが集合し、年長児が歌を披露したりすもう大会をしたりして遊ぶ。
インディアン祭り	7月	当日はお父さんとインディアンに扮して参加する。クラス代表の父親で構成されるめばえの会のお父さんを中心にして各クラスでゲームを楽しむ。年少児・年中児は保育室で体を動かすゲームをし、年長児は園庭に集合しゲームをして遊ぶ。
運動会	10月	子どもと一緒に競技に参加したり、保護者競技に参加したりする。めばえの会のメンバーは用具出し、会の進行、召集など会の運営のすべてを担う。また、OBサークルが駐車場整備を行う。
芋掘り	10月	担当となった保護者が徒歩で芋掘り用の畑まで往復する際の安全の見守りをする。また芋畑の土を芋が掘りやすいようにやわらかくしたり、クラスの目印を立てたりなど子どもたちが到着をしたらすぐに芋掘りが開始できるように準備を行う。
カレーパーティー	10月	保護者が園庭のかまどでカレーを作り、それをクラスのみんなで食べる。そのあと保護者と綱引きなどのゲームをする。
クリスマス会	12月	年長児による歌唱劇の披露を中心としたページェントの後、クラスに分かれる。各クラスで親子共にゲームを楽しむ。最後に母親が出し物を披露する。
ドッジボール大会 (年長組)	3月	年長児クラスの子どものための試合を応援する。その後保護者同士のクラス対抗試合に出場する。

園生活はお母さん方の活動に支えられてとても充実したものになっています。お母さんが充実しているから、子どもも充実するのです。」とあるようにM幼稚園の保育において保護者の参加は欠かせないものとなっている。

4. 事例の分析および考察

(1) 事例の分析

① 内容の構成

本研究においては、表1における行事の中から各年齢における「お母さんと遊ぼう」という行事に着目する。なぜこの行事を分析の対象とするかは、この行事がクラス単位で行われており、保育の対象年齢により参加形式の変化を読み取ることができるためである。「お母さんと遊ぼう」は5月下旬から6月上旬にかけて全クラスで行われている行事である。行事名の通り、内容は幼稚園で園児たちと母親が一緒に遊ぶというものであり、フィールドワークの過程から行事の構成は毎年ほぼ同じであることが観察された。2015年に行われた年長児クラスおよび2016年

6月に行われた年少児クラス・年中児クラスの事例をもとに、分析および考察をしていく。表2は各行事の様子をビデオカメラで撮影し、その映像記録からそれぞれの年齢における行事の構成内容を一覧にしたものである。

表2では、3つの年齢において共通する内容については網掛けをした。また2つの年齢において共通する内容については下線を引いた。またカッコ内には歌やゲームに誰が参加したかということについて記述した。例えば、年中児のゲームにおける「木の中のリス」では、まず年中児が「木の中のリス」で遊び、続いて母親も加わり「木の中のリス」を行ったということを示している。

表からわかるようにどの年齢においても園児たちが待っているところに母親が入場し、園児たちが讃美歌を歌うこと、年長児によって「畑のポルカ」が披露されること、その後親子でゲームを楽しむこと、園児より母親にプレゼントが渡されることという大きな構成は変わらない。また、年長児によって披露されるのは毎年「畑のポルカ」と「サラスポンダ」である。母親の入場場面と「畑のポルカ」の披露、お

表2 お母さんと遊ぼうの構成

年少児クラス (すみれ) 2016年6月2日 保育室	年中児クラス (きく) 2016年6月3日 保育室	年長児クラス (全3クラス) 2015年5月28日 園庭
<ul style="list-style-type: none"> ○母親入場 ○担任教諭の話 ○讚美歌 ○お祈り ○年長児入場 (歌:さんぽ) ○年長児の歌の披露 <ul style="list-style-type: none"> ・「畑のポルカ」 ・「静かな湖畔」(輪唱/年長児・母親) ○歌「せっけんさん」(園児→親子) ○ゲーム <ul style="list-style-type: none"> ・ひとりのゾウさん(園児) ・おひっこしゲーム(親子) ・あくしゅでこんにちは(園児→親子) ・豆つまみゲーム(母親) ・じゃんけんゲーム(親子) ○園児より母親に製作したプレゼントを渡す ○母親たちによる即興劇「大きなきなこぶ」 ○子どもたちによる歌 ○母親による感想 ・ゲーム 子どもの王様(園児) 	<ul style="list-style-type: none"> ○母親入場 ○担任教諭の話 ○讚美歌「お母さんのうた」 ○お祈り ○年長児入場 ○年長児の歌の披露 <ul style="list-style-type: none"> ・「畑のポルカ」 ・「サラスポンダ」(年長児・母親) ・クイズ ○歌「お花がわらった」(親子) ○ゲーム <ul style="list-style-type: none"> ・木の中のリス(園児→親子) ・リズムゲーム(園児→親子) ・お友だちクイズ(園児→親子) ○母親たちによる即興劇「三匹の子豚」 ○園児より母親に製作したプレゼントを渡す ○担任教諭より園児たちの様子の話 	<ul style="list-style-type: none"> ○母親入場 ○讚美歌「お母さんのうた」 ○園児(母親)による歌 <ul style="list-style-type: none"> ・「森のくまさん」(輪唱/親子) ・「サラスポンダ」(親子) ○園児(母親)による歌唱劇 <ul style="list-style-type: none"> ・「畑のポルカ」 ○ゲーム <ul style="list-style-type: none"> ・園児代表者による相撲大会 ・母親による尻相撲大会 ・クラス対抗親子でボール運びゲーム ・クラス対抗綱引き(園児→母親) ○園児より母親に製作したプレゼントを渡す

よび即興劇の準備の場面をとりあげ年齢ごとに分析し考察をする。

② 年少すみれ組(事例1)

年少すみれ組は、全30人(この日の出席は27名)でありそのうち半数が初めてM幼稚園の行事を体験する家庭の子どもたちである。よって、母親の半数はすでにきょうだいたちの通園によりM幼稚園の行事を体験している。

前述したようにM幼稚園では教師の言語的関与があまりない中で、園児たちは集団の中でふさわしいふるまいを獲得し自らのふるまいを調整して、生活していく姿が見られる。この日も教師の言語的関与があまりない中で、園児たちは外から保育室に戻ってくるとイスに着席をしていく。(下線1)中にはアイリのように席につかずに歩きまわっている園児もいるが、(下線2)入園間もない3歳児の6月であるということを考慮すれば、むしろ歩き回っている園児は少ないと考えられる。母親たちが入り口付近にあらわれると、すみれ組の園児は全員、伴奏がまだ流れていてもそれまで歌っていたうたをやめてし

まう。また、母親を大声で呼んだり母親のところに出向いて行ったり、母親が少し離れただけで涙を流す園児がいたりする。(下線3、4)これらのことは、入園したての3歳児において、園の友だち集団との関係よりも母親との関係がより強固であることの表れであり、このことは母親と子どもを抱いて座るという座り方を指定するという点にも表れている。(図1)

続いて母親たちの様子について考えてみたい。会全体の構成を見てわかるように、歌を聞いたり、歌やリズムに合わせて行うゲームの割合がとても多いことがわかる。園児たちと一緒に輪唱で歌ったり、

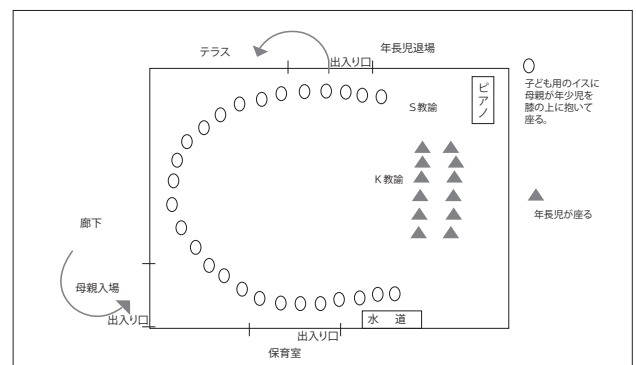


図1 すみれ組保育室

事例1 年少 すみれ組 2016年6月

保育室には円形にイスが並べてある。(図1) 子どもたちは、保育室にもどってきた順に自分たちの好きな席に座る。¹ほとんどの子どもが着席すると、年長クラスのS教諭のアカーディオンに合わせてすみれ組の子どもたちが「せっけんさん」を歌い始める。「♪せっけんさんはいいにおい～・・・」アイリが遅れて保育室にもどってきて、保育室の中を歩きまわっている。²K教諭「次、なにか歌いたい歌リクエストある」と聞く。S教諭「チューリップ歌ったことある」とチューリップの伴奏を弾き始めるとすみれ組の子どもたちが歌い始める。1番が歌い終わったところで、K教諭がアイリに「座っていて」とうながし、アイリは空いている席に座る。続けてチューリップを歌っていると、入り口付近に母親たちがパラパラとやってくる。K教諭、入り口付近に行き、「どうぞお入りください。」と母親たちに声をかける。S教諭のチューリップの伴奏は続いているが、子どもたちは歌うことをやめ入り口付近を見ている。「ママー。」「ママー。」と大きな声を出しながら自分の母親を探す子、2名ほど自分の席を立つ子どもが現れる。K教諭「お子さんを抱いて座ってください。」と母親たちに言い、立ち歩こうとする子どもたちには「お母さん来るから大丈夫」と声をかける。アイリ母親を見つけると近寄っていき、母親と一緒に席に戻り母親にうながされ中央を向いてひざの上に座る。³次々とお母さんたちが保育室に入ってきて、自分の子どもを見つけて中央を向いて子どもを膝に抱き座る。母親が少し遅れてきたワタルは、母親が荷物を置きにいつている間に涙を流している。⁴母親は「なに泣いてるの。」と泣いて涙をふき、ワタルを抱いて席に座る。すべての親子が席につくとK教諭より「今日はお母さんとお子さんたちと遊ぶ日です。お母さん同士の私語は慎んで子どもと遊んでください。」として開始となる。T教諭がすみれ組の子どもたちを数え始める。一人ずつ子どもに歌に合わせて触れながら「♪一人、二人、三人のすみれさん。 四人、五人～・・・」ソウタの母親はソウタの手をとり、歌に合わせてリズムをとっている。⁵K教諭「今日はすみれさん27人です」と人数を確認する。

K教諭「今日はね、あそこでね年長さんが待っていてくれるの。(年少児がイスにすわりはじめたところから、出入り口のところで待機をしていた)年長さんの入場です。」というので、S教諭がアカーディオンで「さんぽ」を弾き始める。歌に合わせて年長児が入場し、年長児用に準備してあったイスに着席する。

K教諭およびT教諭の話(略)・讃美歌を歌う(略)・お祈り(略)

T教諭、「はい、では年長さん立って」と言い年長児が立ち上がる。S教諭のアカーディオンの伴奏に合わせて、年長児が「畑のポルカ」を歌い始める。2番では歌に合わせて5名の母親が体を揺らしたり、うなずいたりしてリズムをとる。5番では9名の母親が足を上下させたり、うなずいたりしてリズムをとる。⁶続いてS教諭の伴奏に合わせて年長児が「静かな湖畔」を歌い始める。歌い終わると、母親たちが拍手をする。K教諭「これは、輪唱ができる曲になっています。今日は年長さんとお母さんで輪唱をしたいと思います。・・・さんハイ。」年長児「♪静かな湖畔の森のかげから～」と歌い始めると、母親たち「♪静かな湖畔の・・・」が続ける。歌い終わるとK教諭「2回繰り返しましょう。お母さんたちも2回、もっとしっかり、さんハイ。」年長児と母親たちが静かな湖畔の輪唱を2回繰り返す。⁷K教諭、年少児と年長児との日ごろのかかわりについて話をし、みんなでありがとうとうながし、年少児が「ありがとうございました」とお礼を言うと、年長児は自分たちの座っていたイスを持って退場する。

・即興劇の準備

2チームにわけて行った豆つかみゲームで負けたチームの13名の母親が「おおきなかぶ」の即興劇を行うことになる。負けたチームの母親はとなりの保育室に移動をする。サキは母親について隣の保育室に移動し、ミサキ、リオ、タクミ、ケントの母親は子どもと手をつないで隣の保育室に移動する。⁸T教諭が「おばあさん役の人?」「犬の人?」と希望をとりながら母親たちに白紙のお面を配る。その後、お面に役の絵を描くことなど母親たちと簡単な打ち合わせをする。ミサキは母親のそばを離れない。すみれ組の保育室ではM教諭が絵本「おおきなかぶ」を読んでいる。M教諭の向かいに12人の子どもが座り、「おおきなかぶ」の読み聞かせをみている。カズヤは母親の膝の上に座り読み聞かせを見ている。⁹

保育者や年長児の歌に合わせてリズムをとったりすることは、ノリを集団で共同生成することであるとらえられる。(下線5、6、7) 本事例では年中児クラスにおいても「畑のポルカ」の歌に合わせてリズムをとったりする母親の姿は見られるが、数はまだそれほど多くない。(下線7)

続いて年長児の歌の披露について考えてみたい。M幼稚園の年長児は、自分たちがどのような役割をもってどのように行動したらよいかということを理解

し、保育者の指示がなくても自分たちで行動することが出来る。本事例においても、待機場所にて15分ほど並んで待ち、年少児とその母親たちの前で「畑のポルカ」と「静かな湖畔」を披露する。その間、年長児の引率を行う保育者はおらず、伴奏を担当しているS教諭から最低限の指示が与えられるだけである。年少児の母親たちにとってこうした年長児の姿を見ることは、自分の子どもと照らし合わせ、年少児から年長児への育ちの見通しを得ることもあ

る。異年齢の子どもたちが生活をする幼稚園という場が可能とする経験であると考えられる。

即興劇の準備の場面では、親子のつながりが強固であることがうかがえる。保育者は保育室で園児に向けて絵本の読み聞かせを始めており（下線9）、これは園児が母親と離れ保育室に残ってほしいという保育者の意図によるものだと考えられる。下線8は保育者の意図に反して、子どもあるいは母親から親子のセットとしてふるまうことを求めている姿がある。これまで家庭における親子のカップリング¹⁰⁾において入園までの期間を過ごしてきたことの表れであるととらえることができる。

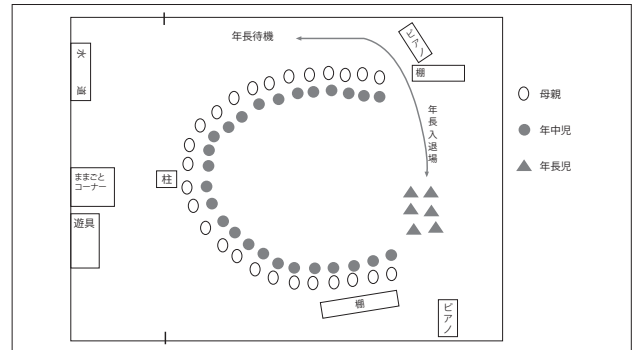


図2 きく組保育室

③ 年中きく組（事例2）

対象の年中クラスは年少クラスの持ち上がりクラスである。よって、クラスのメンバーはすでに同じ

事例2 年中きく組 2016年6月

保育室にイスが2列で半円形に並べてある。（図2）きく組担任のY教諭が子どもたちを半円の中心に座らせ、会の時に友だちとふざけないということやプレゼントの渡し方などの話をする。子どもたちにみんなの座るところは前、お母さんがその後ろに座ることを説明し、好きなところに座るように声をかける。数名の子どもが「やったー」と仲の良い子と隣になるように先を争うようにイスに座る。座ったまま母親たちが入ってくるのを待つ。¹⁰ カナの母親が入ってくると、ショウタが「あのね、後ろのところに座るんだよ。」と説明をする。園児たちは席に座ったまま入り口の方を見たり、声をかけたり手を振ったりしている。「ママ、ユイいるよ」と母親に声をかけたり、「マサトのお母さん～」と友だちの母親に声をかけたりしている。母親たちは自分の子どもを見つけ、後方のイスに座る。¹¹ 母親たちが席に座るまでの間自分の席を立つ園児はいない。カズヤの母親がまだ来ていないが、Y教諭が「すぐ来ると思うので、さっきのリズムゲームしようか」と3回拍手をし、「はい。」と言う。子どもたちが後に続き保育者と同じように拍手をする。リズムを変えたり、腿をたたいたりしながら数回続ける。9割ほどの母親が園児たちと一緒にリズムをとる。¹² 母親たち同士の私語を慎むなどの注意をした後会が始まる。

お母さんのうた（讚美歌・子どもたち立って歌う）・お祈り（略）

Y教諭「それでは、今か、今かと待っていました。今日はばら組さんがこの会に来てくれました。すてきなお歌をプレゼントしてくれるそうです。では拍手で迎えたいと思います。」全員で拍手をして年長組ばら組の子どもたちを迎える。9人の園児たちが歌のために使う小道具（トマト）を持って親子が座っている半円の前方に来て準備をする。6人の子どもが連なり段ボールと布でつくった子牛の衣装で入場すると、母親たちから「わーっ」と歓声があがる。¹³ Y教諭が「さあ、バラ組さん何の歌を歌ってくれるかな」と聞くと、「畑のポルカ」と数名が声を合わせて答えY教諭のピアノ伴奏に合わせて歌を歌い始める。1番では10人ほどの母親が首を振りながらリズムをとる。6番で「♪4番目の畑にトマトを植えたら」の歌詞に合わせて、年長児がトマトを持ち上げ、「♪となりの子牛がムシャムシャ食べた」と歌いながら、子牛にトマトを食べさせると母親たちから笑いが起こる。「♪5番目の畑に～」と歌いながら、子牛がぐるっと辺りを1周する。母親たちのほとんどが体を揺らしたり、足を上下させたり手をたたいたりしてリズムをとっている。¹⁴

年長児は「畑のポルカ」を歌い終わると、道具を置いて前方に並ぶ。Y教諭「ありがとうございます。ばらさんね、もう1曲歌を歌ってくれるそうです。」全員が前に並ぶと年長児数名が声をあわせ「サラスポンダを歌います。ポンド、ポンドのところと、あとは「踊ら」のところを一緒に歌ってください。」と母親たちに説明をする。「♪サラスポンダ、サラスポンダ」と年長児が歌い母親たちが「♪ポンド、ポンド」とリズムをとる。¹⁵

○即興劇の準備

ゲームが終わった後、Y教諭がイスの裏にカラーテープが貼ってある母親は即興劇を行うことを伝えると、カラーテープが貼ってあった半数の母親が保育室の端に移動する。Y教諭が子どもたちの作ったお面を母親に手渡すと母親たちが打ち合わせを始める。¹⁶ チアキやアキトが席を立てて打ち合わせの様子を見に行くが、ほとんどの子どもが自分のイスに座り、席のそばで待っている。¹⁷ Y教諭が半円の中心にイスを持ってきて座ると、「きくさんは真ん中に集まって」と手招きをする。子どもたちは集まって、Y教諭の周りに座り始める。Y教諭が「♪トントントントン、ひげじいさん」と手遊びを始めると、自分の席に座っていたミナミ、カズヤや母親たちの様子を見ていたチアキもY教諭のそばに座り手遊びを始める。¹⁸ 「ひげじいさん」「キャベツの中から」の手遊びをしたあと、Y教諭「お母さんたちに準備ができたか聞いてみよう、もういいか聞いてみよう、さんハイ」子どもたちが「もういいかい～。」と声をかける。母親たち「もういいよ。」と答える。

クラスで1年間を過ごした友だちである。まずは園児たちの様子から分析をする。自分の好きな席に座るように言われると、仲の良い友だちと隣同士で座ろうとする様子から、(下線10) 仲間関係が確立していることがわかる。母親が入場する場面では、自分の席から後ろ側を向いて友だちの母親に声をかけたりする姿や、自分の母親を呼ぶ姿はみられるものの、(下線11) 自分の席を離れる園児は一人も見られない。また友だちの母親に話しかけている様子からは、自分の母親だけでなく友だちの母親の参加を楽しみにしている様子がわかる。また、担任教諭がリズムゲームを始めるとそれに応じて園児全員がよく見て同じリズムをとりはじめたり(下線12) 手遊びを始めたりする(下線18) ことから、自分たちで行為の調整ができるクラス集団が確立している様子が見えてくる。

母親たちの姿を見てみると、前述したリズムゲームでは特に何も指示されていない中で、ほとんどの母親がリズムをとりはじめていた。(下線12) また年

長児の「畑のポルカ」の場面において、首を振ったり体を揺らしたりしながらリズムをとる母親が多くみられた。この「お母さんと遊ぼう」までに年少児クラスにおいて少なくとも1回以上「畑のポルカ」を聞いていることになる。年中児の様子や年長児の歌に対する母親たちの反応が豊かであることは、(下線13、14) 内容の重なりにより関与を容易にしていること、参加意識が高いことの表れであると読み取ることができる。また「サラスポンダ」の歌では、母親たちが歌の根幹であるリズムを刻むことになり、(下線15) 年長児たちの歌を支える構造となっている。

即興劇の準備の場面では、教師の関与がなくても事前打ち合わせをする自立した母親集団の様子を読み取ることができる。(下線16) また同時に、席の座り方や子どもたちの様子(下線17)からは、親子のカップリングが緩くなり、子どもも母親も自立して行動できるようになっていることがうかがえる。

事例3 年長全クラス 2015年5月

芝生広場を取り囲むようにして5歳児が集まり、クラスごとに長イスに座り母親が来るのを待つ。(図3) 園の入口付近のバスの乗り場には母親たちが集合し各々雑談をしながら待っている。5歳児がそろったところでN教諭:「はいお待たせしました。」と母親たちを呼びに来る。母親たちは各自広場に移動し、自分の子どものクラスの子どもたちを取り囲むように立つ。¹⁹ 広場ではS教諭のアコーディオンに合わせて歌を歌っていて、母親たちを気にする様子はない。²⁰

母親たちがそろくと園長先生の話があり、その後園児が母親たちの方を向き讃美歌「お母さん」の歌を歌う。理事長先生が子どもたちに向かって「お母さんと一緒に遊ぼうね」と言うと園児はそろって「はい!」と返事をする。N教諭が「次は歌を歌います。はい、昨日歌をリードしてくれた人、前にでてきて」と言うと、各クラス2名計6名の園児が前に出てきて、園児は再び円の中心を向く。S教諭はアコーディオン、O教諭ギターで「森のくまさん」の伴奏を始める。前にでてきた6名が「♪ある日～」と先行して歌をリードする。N教諭「お母さんも一緒にどうぞ」と声をかけ、母親たちもリードする園児に続いて一緒に歌う。²¹

N教諭「じゃあ大好きなお歌、サラスポンダ。じゃあ一番初めね、男の子がポンダ、ポンダをいこう。で女の子が、歌でいくよ。じゃあ、男の子さんハイ。」男の子:「ポンダ、ポンダ、ポンダ、ポンダ・・・」とリズムをとりはじめる。女の子:「♪サラスポンダ、サラスポンダ～」と歌い始める。リズムと歌がずれる。歌い終わるとN教諭「ちょっと、大丈夫?合わせてよ」と言い、母親たちの笑いが起こる。N教諭「はい、お母さん、覚えたよね。今度はお母さん、おうちの人はポンダいこう。子どもはお歌。はいじゃあお母さん。さんハイ。」母親:「ポンダ、ポンダ、・・・」園児:「♪サラスポンダ、サラスポンダ～」保護者のリズムに合わせて子どもたちがサラスポンダを歌う。²²

N教諭「はいじゃあ、お待たせしました。畑のポルカ。」子どもたちが歌に合わせて出す道具の準備をしている間、園長先生:「○○さんどこ?△△さん。いらしてる?」と2名の保護者の名前を呼ぶ。呼ばれた2名の母親には、白い布と段ボールでできた大根の衣装が準備されており、それを渡され、着替えるようにうながされる。2名の保護者は物蔭で大根の衣装をつけ準備をして桜のみはり台のかげで待つ。²³ 園児たち「♪1番めの畑に○○植えたら～」と畑のポルカの歌詞に合わせて、円の中心に15人ほどのグループが出てくる。各グループが歌詞に出てくる野菜や段ボールで作った動物を持ってきて順番に入れ替わりながら演じる。「♪畑のまわりでポルカをおどる」のところでは、スキップをして一周したり、踊ったりして各グループで演じ方を工夫している。子どもたち:「♪5番めの畑に大根植えたら～」と歌い始めると、大根に変装した保護者2名が円の中心に突然現れ、走り回ったりはねたりオーバーに動きながら歌に合わせて踊る。子どもたちから歓声が上がると。²⁴

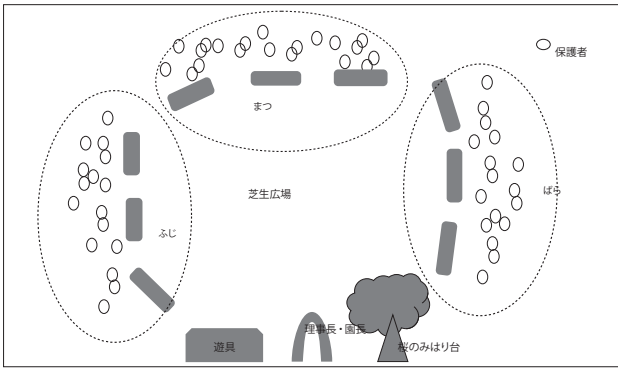


図3 年長全クラス（園庭）

④ 年長全クラス（事例3）

年長児の「お母さんと遊ぼう」は年長児3クラス合同で行われる。年少児や年中児のクラスで見られたような個人の座席はない。園児は長椅子にクラスごとに固まって子ども集団として座り、その付近に母親たちが集団で立つというものである。（図3、下線19）母親たちは年長児が歌を歌っている間に入場し、入場し終わると会が始まる。園児たちはクラスの仲間たちと共に歌いながら会が始まることを待ち、母親を探すことではなく集団としてふるまうことを優先している様子がわかる。（下線20）これらから園児たちにおけるクラス集団、仲間集団の同調性はかなり高まっている様子がうかがえる。

母親たちは、年少児、年中児の時以上に会を盛り上げる存在として強い関与が期待されている。例えば園庭という広い空間で「森のくまさん」を輪唱することや「サラスポンダ」のリズムを刻むことなどである。（下線22）しかし、これまでの参加経験によって「サラスポンダ」は何回か聞いたことがある曲となっており、経験が関与を容易にしていると考えられる。また母親たちにとって年少児クラスから3回目となる「畑のポルカ」では、子どもたちの様子を見るだけでなく、一緒に歌唱劇に参加し楽しませるといった役割も担う（下線23、24）ことになる。

どのような席の配置であるかという環境構成に始まり、会全体を通して個々の親子がセットで楽しむということは年少児および年中児における「お母さん」と遊ぼうと比較し少ないことがわかる。それは同時に親集団として子ども集団とかかわるとい

とでもある。

(2) 全体考察

M幼稚園における「お母さんと遊ぼう」という行事に着目し、各年齢の行事の構成およびその参加の様子について分析を行ってきた。この行事はM幼稚園の年間の生活を考えるならば、きわめて部分的なものである。しかし、行事の様子から園の子育てに対する理念を読み取ることができる。それは、園と親たちが協働してM幼稚園の子どもたちを育てることである。家庭の子育てと幼稚園における保育は、時間帯によって分断され、それぞれがそれぞれの責任で行えばよいというものではない。生活する子どもを中心として共の領域を創出し、親子で楽しみながらお互いに成長するという実践がM幼稚園の行事であるにとらえることができるであろう。

M幼稚園では、普段の保育を親が参観することを禁止している。その一方で、親と子で行われる行事への親の参加は重要視している。今回は紙幅の都合により詳細について述べることができなかったが、毎月のお誕生会や運動会も親は行事の中に重要な役割として組み込まれている。（表1）M幼稚園の行事には、行事の参加を通して親集団が形成され、その集団が子どもたちの育ちを支えるという経験を重ねることができる仕組みが隠されていると考えられる。親が園の行事に参加をすることを通して「M幼稚園の子どもたちの成長が楽しみ」といった共同的育児観が醸成されると考えられるだろう。今回の事例の分析結果から、こうした育児観の醸成を可能とする2つの要因について考察したい。

1つめは親子のカップリングの解体である。この解体とは親と子の関係を分断し、他の個人や幼稚園へと直線的に結びつけようとするものではない。現代の日本社会において強固に枠付けされた個と個として「母親-子ども」の「育て-育てられる」関係をゆるめるものとして解体をとらえる。「お母さんと遊ぼう」の親子の位置関係を始めとする経年変化に見られるように、強固であった親と子のつながりを離れ、子と親が自立し、子ども集団、親集団を形成していく様子がわかる。これは、日々の保育におい

て凝集性の高い子ども集団が形成されることによって容易になっているともいえる。

2つめは親の状況への参加および関与である。運動会などの園の行事を考えたとき、一般的に親は子どもの様子を観客として見ていることになる。しかし、M幼稚園において親は行事を構成する重要な役割を担う。今回分析した事例においては、一緒に歌を歌ってノリを共有する、演じることにより子どもたちを楽しませるといった親集団としての関与が盛り込まれている。親集団として子どもの集団と共に行事に参加し、関与することによって「母親が育てる」から「園の親たちが育てる」という共同的な育児観が醸成されていくと考えられる。

5. まとめ

近代化や都市化にともなう子育ての私事化は、子育てを私的領域へと押し込めてきた。そして子育てにおけるもろもろの問題の解決策として、各種施策が進められている。保育施設における子育て支援の重要性が言われるようになり、各幼稚園では新たな取り組みを始めている。その主なものは、在園児の親の育児相談に応じることであったり、保育時間を延長しての預かり保育であったりする。しかし、これらの実践は子育てを家庭で担うか、保育施設に委譲するかといった選択にすぎず、私的領域と公的領域の区分は明確である。⁽¹⁾

子育て支援の政策に述べられているように、父母その他の保護者が子育てについての第一義的責任を有するというを基本的認識とするならば、父母が子育てにやりがいや喜びを感じられなければならない。父母が子育ての当事者でありながら、それを共に支える仕組み作りを考えていくことが重要であるだろう。

M幼稚園において長年にわたり行われてきた実践は、幼稚園と家庭とが共に子どもたちの健全な育ちを目的として共空間を創出し、それがうまく機能している例であると考えられることができるだろう。子育てを媒介とした共空間は保育施設のみに可能な空間

ではない。特に近年子育て支援の施策とともに広がりつつある子育てひろば⁽²⁾は多数の親子が出会う場として共空間の創出が可能であると考えられる。今後は子育てひろばにおける共空間の創出について検討をしていきたい。

注

- (1) 牧野カツ子 2009 子育ての場という家族幻想－近代家族における子育て機能の衰退－ 家族社会学研究 第21巻第1号 pp.9
- (2) 前原寛 2008 『子育て支援の危機－外注化の波を防げるか』 pp.16 創成社
- (3) 天童睦子編 天童睦子 2016 第4章新自由主義下の再生産戦略とジェンダー 『育児言説の社会学』 世界思想社 pp.123-127
- (4) 松木洋人 2013 『子育て支援の社会学』 新泉社 pp.37-41
- (5) 文部科学省 平成20年告示 幼稚園教育要領 第3章 指導計画及び教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動などの留意事項 文部科学省告示第26号
- (6) 及川留美 木村学 2015 現代学校教育システムの分業化論理の克服は可能か－私立めばえ幼稚園の保護者の保育参加の意義－ 日本こども社会学会第大会発表資料
- (7) 岩田は「ノリ」を関係的存在としての身体による行動基底にあるリズム、およびその顕在の程度、すなわちリズム感、また、身体と世界との関係から生み出される調子、気分のことであると定義している。本研究においても岩田の定義するノリと同様の意味で使用をする。 岩田遵子 2007 『現代社会における「子ども文化」生成の可能性－ノリを媒介にするコミュニケーションを通して』 風間書房
- (8) 小川博久 岩田遵子 2015 「現代学校教育システムの分業化の論理の克服は可能か(3)－私立めばえ幼稚園における通過儀礼としてのお誕生会の分析を通して－」 日本教育方法学会第51回大会 発表資料
- (9) 前掲(8)
- (10) 小川は幼児と幼児生命維持活動を助成する大人の役割が一对になった状況をカップリングと規定している。そして現代の核家族化で省力化された消費生活において、カップリング過程は特化されたものと意識され、負担感を増大化させるとしている。 小川博久 2009

- 幼児教育の歴史を振り返る 『戦後の子どもの生活と保育』日本保育学会編 相川書房 pp.1-7
- (11) 子どもの理解を深めることを目的として父母の保育参加を実施している園もある。しかしこれもお母さん先生やお父さん先生として保育現場に入ることを考えれば、私的領域と公的領域の区分は残る。
- (12) 中谷は親の主体的な子育てひろばへの「参加」を通して、「支援する側－される側」といった二分化された構造ではなく、インフォーマルなネットワークと活動により「支え、支えられる」という関係が構築されているとしている。中谷奈津子 2008『地域子育て支援と母親のエンパワーメント－内発的発展の可能性－』大学教育出版 pp.168-174

参考文献

- 島津礼子 2014 幼稚園の「保育参加」における学びの生成について 保育学研究 第52巻 第3号 pp.34-44
- 相馬直子 2004 「子育ての社会化」のゆくえ－「保育ママ」制度をめぐる政策・保育者の認識に着目して 社会福祉学第45巻2号 pp.35-45
- 船橋恵子 2006 育児のジェンダー・ポリティクス 勁草書房

謝辞

本研究にご協力くださいました理事長先生、園長先生をはじめとする先生方、そして園児および保護者の皆さまに感謝申し上げます。

(おいかわ るみ) 東京未来大学